

第6章 小川琢治の地理教育観

第1節 小川琢治に関する先行研究と経歴

第1項 小川琢治に関する先行研究

東京帝国大学の山崎直方と共に、日本近代地理学の形成期において大きな足跡を残した人物に京都帝国大学の小川琢治(1870-1941)がいる。小川は山崎と生年が同じでほぼ同時代に活躍し、「東大の山崎、京大の小川」としてしばしば比較されてきた人物である。例えば、辻村¹は、山崎と小川が地理学研究開始の理由を、「当時の学者としては珍しく文芸の趣味が豊かであり、人間生活への関心が大きかったことが、両者を地理学の開拓に向かわせたのではなかろうか」と述べ、両者とも地質学出身ながらも地理学へと転身した理由にふれている。石田は、山崎と小川をとりあげ「山崎は高等師範学校教授、あるいは地理学の新進帰朝者というので、教育界にも広く関係し、やがて編纂の中等学校教科書は広く使われるようになり、中等教員の検定試験委員ともなる。在京ということと地理学の唯一人者というためである」とし、小川よりも山崎のほうが地理教育界に影響力を持っていたことを示唆している²。

小川のみを研究対象としてとり上げた先行研究としては、水津³が、小川を近代歴史地理学の創始者として位置づけ、その目指すところは「ヘットナー(A. Hettner)が目指した過去のある断面を対象とする地理学とは異なり、歴史的考察を重視する人文地理学であった」ということと、小川を評価する点として、環境決定論的立場を避け、地表全体の体系的把握につとめたことに注目している。また、地質学専攻であった小川が地理学研究に着手する契機が、1896年に『台湾諸島誌』を執筆してからであり、その際に重用した中国の古地誌への興味が、小川を中国歴史地理研究へと向かわせ、このことが京都帝国大学の地理学研究の伝統である歴史地理学研究へ至ったとしている。

さらに、岡田⁴は小川を歴史地理学の視点からのみ捉えるのではなく、刀剣や囲碁、戦争の地理学にも研究が及んでいたことに触れ、その幅広い研究領域を捉えている。小川が学問的立脚点とした歴史地理学については「科学としての地理学なるものは地文人文に論なく、土地に立脚して地球表面に起る現象を観察する点が他の科学と区別すべき特徴であって、又た此の空間を基礎とする点が時間の継続を基礎とする歴史学と対比する立場である」という小川の言をとり上げ、地理学的風景を研究対象に定め、「自然風景が人類の集合により変形されて行く行程を辿ることが人文地理学の目標として歩むべき大道」とし、これにより地理学の統一を目指したとした。小川によって地理学の統一と地理学研究への歴史的考察の導入がみられたのである。小川を対象とする学的研究としては、この岡田の研究が最も新しくかつ総合的であり、小川の多彩な活躍がよくとらえられている。このように日本の近代地理学史上重要な位置づけがなされている小川が、学校教育制度下にある地理科に影響を与える可能性は多分にありうる。

しかしながら、小川を地理教育の見地からとらえた研究は依然少ない状況にあると言えるであろう⁵。というのも、小川が自分の地理教育観を体系的な著作物として残しているわけではないことから、地理教育観を捉えることに困難を伴う。そこで、その困難を克服するために、彼が著した地理教育に関する論文や中学校地理教科書を取りあげることで、小川の地理教育観を抽出することは可能であると思われる。実際、小川は山崎と同様に中学校地理教科書を多数残し、小川の地理教科書には彼独自の地理教育観が具現化されていると考えられるからである。本章では、小川が著した中学校地理教科書の記述内容や例言を取りあげることによって、小川の地理教育観の変遷を叙述し、その地理教育観と彼が学問上立脚した歴史地理学との関係性を検討することを目的としている。

本章の構成は、第1節「小川琢治に関する先行研究と経歴」において小川の経歴を概観する。第2節「小川琢治の地理教育に関する論文と地理教科書」では、小川が活躍した時代の地理教科書の発行状況と、地理教育に関する諸論文と小川が著した教科書を時系列でおって、その変遷を具体的に叙述する。第3節「教科書『新外国地理 甲表準拠』の内容」では、小川の地理教育観が特に表れているとみられる同書を取りあげ、その独創性について述べる。第4節「小川琢治の地理教育観の形成要因」では、小川の教科書と他の執筆者のものとを比較し、小川の地理教育観の形成要因を考察する。

第2項 小川琢治の経歴

小川琢治の経歴と研究活動を知るために、第6-1表を作成した⁶。小川琢治は、1870年和歌山県で儒者浅井南溟(ナメイ)の次男として生まれた。14歳で和歌山中学に入学し、父より四書五経などを口授された。1886年17歳で上京し東京英語学校に籍をおき、1887年に海軍兵学校の受験には失敗したものの、第一高等学校に入学することとなった。1889年小川駒橋(コマキツ)の養子となり、1891年の濃尾の震災体験と紀州旅行を契機として、地質学に進むことを決意した。

1893年帝国大学理科大学地質学科に入学し、1894年には小川小雪と結婚、小川姓を正式に名乗ることとなる。1896年に同大学を卒業し、大学院に入ったが1897年退学、地質調査所に勤める。房総半島の火成岩採集、別子銅山の地質を調査した。1900年万国博覧会と地質学会議出席のためにフランスへ洋行し、帰国後1902年和田雲村(1856-1920)と共に中国鉱物資源の調査を行い、1904年には日露戦争で日本軍が遼陽を降したことによって支配した烟台炭鉱の地質の調査を大本营御用掛として行った。

1907年に開設された京都帝国大学文科大学地理学講座に、1908年に教授(史学地理学第二講座担任)として迎えられ⁷、1914年には砺波地方の散村を取り上げた「越中国西部の荘宅 Homesteads に就て」を発表し、後の集落地理学に先鞭をつけ、同年「信濃国梓川の氷河遺跡」により低位置氷河説を唱えた。

その後は京都帝国大学の地理学教室を主宰し、1921年理学部へ移るも、地理学への関心を持ち続け、1924年には雑誌「地球」を創刊した。1930年に定年退官するまで、多様な研

究者たちを輩出した。歴史性を重視する小川の考えは、京都帝国大学地理学教室の伝統的な姿勢の一つとなったことは周知の事実である。退官後も1931年から32年にかけて、「中央日本の洪積世氷河作用に就いて」により、低位置氷河論争を再度引き起こすなど研究活動は続けられた。

こうした地理学研究の一方で、小川の業績は地理学にとどまることなく、非常に幅広かった。例えば、1912～1917年の間、第6次調査⁸まで行われた宮崎県の西都原古墳群の発掘にも携わり、小川は京都帝国大学助手梅原末治らとともに第3次発掘隊(1913年)として参加した⁹。その他、刀剣に関する研究、晩年には戦争にかかわる地理学についての著作『戦争地理学研究』(1939)もあった¹⁰。また、三男湯川秀樹(1907-81)は「父は地質、地理の専門家であったが、趣味が広く、多かった。専門外の雑書をいくらでも買い集める。書画も好きだ」と実父である小川について述懐している¹¹。このように、漢籍にも造詣が深く、地質学や地理学にとらわれない幅広い教養¹²をもっていたが、1941年心臓発作により逝去した¹³。

第6-1表 小川琢治の主な経歴・業績一覧

年	事項
1870	田邊藩錦水城下(現和歌山県西牟婁郡田辺町)にて出生(5/28)
1896	帝国大学理科大学地質学科卒業 同大学院入学、『台湾諸島誌』
1897	同大学院退学, 農商務技手(地質調査所地質課勤務),
1898	農商務省技師, 鉱山局勤務(2), 『地学雑誌』編集開始(～1907)
1899	「日本群島地質構造論」(地学雑誌 11・14)
1900	仏国出張(1)(万国地質学会議; ～1901), 『百万分一日本帝国地質図説明書』
1901	帰朝(5), フランス政府より記章受領(7), 『二十万分一地質図幅及説明書(高地他)』
1902	清国出張(～1903)(4)
1903	
1904	大本営御用掛兼務, 清国出張
1905	大本営御用掛兼務を免ず(9), 関東州民政署付兼務を命ぜられる(9)(～1906)
1906	関東州民政署付兼務を免ぜられる(3), 「西南日本地質構造概観」(地質要報 39)
1907	韓国統監府派出所事務官事務嘱託, 調査課長を命ぜられる(8)
1908	同嘱託を解かれる(2), 京都帝国大学文科大学教授(史学地理学第二講座担任)(5)
1909	理学博士になる(9)
1910	清国出張(7)
1911	
1912	京都帝国大学理科大学地質及岩石学並鉱物学実験授業担当, 中華民国大連旅順奉天へ出張(7),
1913	

第6章 小川琢治の地理教育観

1914	西都原遺跡発掘, 「信濃国梓川の氷河遺跡」(地学雑誌 26) 「越中国西部の荘宅 Homesteads に就て」(地学雑誌 26)
1915	『近畿地方の土地と住民』
1916	中華民国出張(6)
1917	中華民国より帰朝(1), 中華民国へ出張(7)
1918	欧米諸国へ出張(10)
1919	
1920	欧米諸国より帰朝(6), 学術研究会議員となる(11)
1921	京都帝国大学文学部史学地理学第二講座担任を免じ, 分担となる(9), 文学部勤務を免じ, 理学部勤務を命ぜられる, 地質学第二講座担任となる(12)
1922	
1923	京都帝国大学図書館商議委員会委員となる
1924	地球学団を結成「地球」創刊, 『日本地図帖』
1925	京都帝国大学理学部長となる(12), 『市町村大字読方名彙』『日本地図帖地名索引』
1926	帝国学士院会員となる(2), 京都帝国大学理学部長を免ぜられる(12)「人文地理学上より観たる日本の都市」(地球 5)
1927	
1928	『支那歴史地理研究』『人文地理学研究』, 「居住地理学の問題としての日本住宅」(地球 9)
1929	『地質現象之新解釈』『続支那歴史地理研究』
1930	京都帝国大学地質学第一講座分担となる(5), 定年退職(6), 京都帝国大学名誉教授となる(8)
1931	「中央日本の洪積世氷河作用に就いて」(地球 16) (~1932)
1932	「中央日本氷成堆積物の分布」(地球 18) (~1933)
1933	
1934	
1935	
1936	教員検定委員会臨時委員命ぜられる(10)
1937	教員検定委員会臨時委員免ぜられる(12), 『地球』誌廃刊
1938	
1939	『戦争地理学研究』
1940	
1941	逝去, (遺稿)『一地理学者の生涯』(小川環樹編)

〔()は月を表す。〕

第2節 小川琢治の地理教育に関する論文と地理科教科書

第1項 小川琢治の地理教育についての論文

小川は教科書執筆以前に地理教育論文を数本著している。それらは1910年以前に書かれたもので、教科書執筆に対して何らかの影響力を持っていたと考えられるので、教科書内容を採り上げる前に概観する。

1898年の論文「矢津昌永氏中等地文学を読みて」¹⁴と論文「矢津昌永氏中等地文学の定義を駁す」¹⁵、1904年論文「人生に及ぼす地理学の影響（牧口常三郎君著人生地理学の批評）」¹⁶では、地理学の用語について細かな定義づけを求める姿勢がうかがい知れる。無論学問において、用語の正確さを期することは重要であるので、小川が学的知識を背景として厳しい立場を矢津と牧口に対して求めたことを示している。

1899年の論文「小学校地理学教授上の注意」¹⁷では、地理教育について小川の見解が述べられており、「地理的位置の把握，地球に適応する人間の努力の理解，交互助力の理解，観察・記憶・推理・想像力の練磨，自然と人間の関係の理解こそが教授上重要である」とした¹⁸。その際、「教師が言ひ過ぐること」，「一定の教授の方針を欠如すること」，「黑板，地図及地球儀の応用を欠くこと」，「比較的不必要なる都府山川の如き瑣末の点に時を費すこと」，「教科書に拘泥すること」といった教育現場の視点からの注意を忘れなかった。宿題に関することや、掛け地図について、製図について等についての詳細な指摘も小川の地理教育観が現場からの視点を忘れなかったことを裏付ける。この論文で小川は「目下我邦の中学程度の学校に於ても此方法を参考して益する所少なからざらん」と述べており、中学校にも通じる地理教授の方法として見解を述べている。地理学を教授する目的についても、「地球上の重要な地の位置と特質とを確乎と知らしむることなり〔中略〕地球の人類の住居に適することと造化の妙工によりて人類の安楽なる生活を享受することを知らしむることなり〔中略〕人の相依らざる可からざるの原則を示す(例せば日本が絹布蚕糸を欧米に売り，毛布羊毛綿花綿糸を是より買ふが如き，其相依りて交互に助力する考証なり)〔中略〕観察，記憶，推理，想像等諸心力を練磨することにして，之を修養上の利益といふべし。されば児童に教ゆるものは決して地理学を以て単に地球表面の記述に安んず可らず。其住民と地形気候等より受くる所の生活上の感化とを注意し，地球と人との関係を密接せしめて，直接の利害の観念を吹き込むこと肝要なり」と述べた¹⁹。

また、「地形と政治上の関係」については「政治上の区画を学ぶ前に地文的特性を知るべし」としたものの、「地形を注意することも気候，産物と人の福利に関係する範囲に止めざる可らず」という限定を加えている。その他に、地形を教授する際の手段として、「児童の目に触れ易き戸外の状態に就て説明すること〔中略〕砂にて模型を作る台を用うること〔中略〕高低図を示すこと〔中略〕地文図を示すこと〔中略〕高低地球儀を示すこと」と具体

的に挙げている。また「外国地理」についても、「先つ近より初めて遠に及ぼし」とし、アジアの国々、次にロシアドイツイギリス等直接関係のある国、最後にアメリカ、豪州、南米、アフリカという順序がよいとした。「東京との関係」では、東京との間を旅行すると仮想し、その道筋を考えさせ、その交易品を語らせるなどの具体的方法もみられた。「地図の使用」では、高低図、国境のみを記入した暗射図を用いるのは必要なことだが、それ以外に「地図は常に目に触れ易き所に掛け置き、生徒をして不知不識の間に地理を覚らしむべし」と細かなことまで注意している。その他、「地球儀の使用」、「製図」、「宿題」等細かに述べられている。紙数はそれほど多いわけではないが、小川が初等、中等教育で求める内容が要約されている論文である。

こうした小川の地理教育についての論文は、小川が教育現場にも十分に配慮していったことを示し、教育現場をふまえた地理教育観であった。では、次節以降、上記にみられた考えが教科書に具現化されていったのか否かを検討する。

第2項 中学校地理科教科書発行における小川の位置付け

第2章の第2-1図において中学校用地理教科書(初版のみ)の発刊数を示した。1902年頃に大きく増加し、その後1910年代、1920年代、1930年代を通していくつかのピークがある。中学校が一部の者のための教育機関から大衆教育機関へと移行していくなかで、教科書の発刊数も1930年代にかけて伸びていったのであろう。小川が教科書を執筆した時期は、1900年代に一気に花開いた地理教育が1910年代、20年代、30年代へと拡充していった時期に相当する。

1910～30年の中学校地理科教科書の代表的な執筆者としては、三省堂編輯所、守屋荒美雄(1872-1938)²⁰、六盟館編輯所といったアカデミー地理学者とは異なった人たちや会社が首位をしめているが、それに山崎直方、石橋五郎(1876-1946)、小川琢治といったアカデミズム地理学者たちが続いていた(第4章;第4-1図と第4-2図)。

その中から、小川が著した地理教科書を第6-2表にまとめてみた。小川が著した教科書は、日本地理7冊、外国地理5冊、通論3冊、地図帳1冊で全16冊となっている。小川の地理科教科書がどれほど普及していたのかの判断は難しいが、小川の三男である湯川秀樹が「私の入学した京都一中では、山崎博士の教科書を習った。当時私の父も地理学の教科書を出していた。少し後になってから知ったことではあるが、このころ全国の中学校では、たいてい、この二つの教科書のどちらかを採用していたようである」²¹とあることから、1920年頃には小川の教科書は広く普及していたものと考えられるが、具体的な数字は不明である。

第6-2表 小川琢治が著した中学校地理科教科書一覧 (1912~1939年)

初版	書名	出版社	頁	改訂等
1912	地理学教科書 日本之部	富山房	154頁	1928年まで訂7
1913	地理学教科書 外国之部上中下	富山房	上106・中110・下138	1927年まで訂14
1914	地理学教科書通論之部	富山房	132頁	1921年まで訂8
1921	中等地理学 日本之部	富山房	183頁	1930年まで訂8
1921	中等地理学 外国之部 上中下	富山房	上132中152下193	1930年まで訂9
1922	中等地理学通論之部	富山房	148頁	1924年まで訂3
1927	中等世界地図帖	博多成象堂		1927年まで訂3
1929	新地理学 日本之部	富山房	168頁	▲
1931	中等地理学 日本之部 乙表	富山房	228頁	1935年まで訂5
1932	中等地理学 外国之部 乙表	富山房	231頁	1932年まで訂正再販
1933	新外国地理 上中 甲表	富山房	上113下179	1935年まで訂3
1937	中等新地理 概説之部	富山房	86頁	▲
1937	中等新地理 日本之部	富山房	200頁	▲
1937	中等新地理 外国之部	富山房	218頁	▲
1939	新日本地理 中学校用	富山房	256頁	▲

〔国立教育政策研究所教育図書館資料を参照し、筆者が作成した。(注)▲は、改訂がないことを示す〕

次節以降では、著者の意図が表れている「例言」と具体的な記述内容を取りあげ、教科書の変遷を叙述する。外国地理についてはアメリカ合衆国、日本地理においては関東地方、台湾などを例として検討して分析する。

第3項 1910年代の教科書

1910年代の中等教育機関は「競争の原理に基づく淘汰機関であり、健康、経済力、学力の三拍子に恵まれなければ中学校卒業は困難であり、普通教育というよりも、一部の者のための教育機関であった」²²といわれている。法令的背景からみると、1911年中学校教授要目改正(文部省令訓令第十五号)が実施され、「各学科目の目的を達成し学科目の連絡をとる事、〔内容の〕順序は変えてもかまわないこと、注入主義をさけること、学年のおわりに内容が適当にならないこと、教授用具は日用品を使い教員が制作すること」等が規定された²³。注入主義ということばが用いられているように、既にこの頃から地理科は知識を暗記させる教科とみなされ、地理科をつめこみ教科とみなす批判がこの頃にはすでに見られることがわかる。

小川が1910年代に著した教科書は、1912年『地理学教科書 日本之部』²⁴、1913年『地理学教科書 外国之部上中下』²⁵、1914年『地理学教科書 通論之部』²⁶である。

この時期の第1の特徴として、地名や物産を羅列した教科書記述が目立つ。例えば、小川著『地理学教科書 日本之部』の「関東地方の気候及産業」の項では、

地勢西北に山地ありて寒風を防ぎ、東南は海に浴し、黒潮近く流れ、気候温和なれば、房総・相模の沿岸には大磯・鎌倉・葉山・北條等避寒避暑の地域多し。廣大なる関東平野は農業に適し、河流に沿へる低地は米穀よく熟し、邱陵台地は麦畑多く、茨城・埼玉の麦生産額は他に比類なく、宇都宮・水戸以北の地方及相模の秦野附近は煙草を、下野鹿沼附近は麻を、又東京市近郊は野菜を、小笠原島は砂糖・香蕉を産す。

という、どこで何が取れるということを述べた地名物産を羅列する記述内容、つまり自然現象と人文現象を関連づけない方法による教科書記述となっている。小川著『地理学教科書 外国之部上中下』の「北アメリカの産業」²⁷の項においても1912年の『地理学教科書 日本之部』と同様に、

国土廣大、地味肥沃にして、又商工業振興し、産業の隆盛なる天下無比なり。農業は産業の首位を占め大農法最も発達せり。中部以東の地にありては、最北に燕麦帯あり、中部に小麦帯、玉蜀黍帯・大麦帯東西に連り、南部は甘蔗帯・綿花帯又東西に接す。小麦・玉蜀黍・綿等は産額世界第一位に居り、綿の如きは全世界の過半を産す。牧畜はロッキーの東斜面に盛にして牛・豚の数亦世界に比なく、馬・羊も亦多く・シカゴの屠獸場は、日に十数万頭を屠殺すといふ。〔以下略〕

となっており、産物を羅列的に記述する傾向が強いことがわかる。

しかしながら、1914年『地理学教科書 通論之部』²⁸ ²⁹では、自然と人文現象関連付ける視点にたち前二者とは趣を異にしている。特に同教科書の第2編では、自然環境と人間の関係を記述することに力点が置かれている。

第6-3表 1914年『地理学教科書 通論之部』の目次

第1編 地文地理 前編
第1章 地理(地球の形状・経緯度・地磁気・地球儀と地図・設問)
第2章 陸地の形状(陸地の肢節・大陸の区分及び地勢・設問)
第3章 地形の変化(水の営力・大気生物及人類の営力・火山作用・地震作用・造山作用・地貌の輪廻・設問)
第4章 海洋(海洋の分布・海底の形状・海水の性質・海水の運動・設問)
第5章 大気(気圏・気温・気圧・大気中の水分・天気及気候・設問)
第6章 生物(植物・動物)、第7章 地勢気候生物相互の関係(設問)
第2編 人文地理通論
第1章 人類(人類と人種・言語及宗教・人口の密度・設問)
第2章 自然と人生(食物と人生・衣服と人生・住居と人生・気候と人生・地形と人生・自然と国民性・設問)
第3章 生業及交通(生業・交通・設問)
第4章 政治(国家の組織・国家の版図・国家の境界・国家相互の関係・国力比較・設問)

第3編 地文地理 後編

第1章 太陽系及宇宙（星・太陽系・宇宙・太陽系の成因）

第2章 地球の運動（自転及公転・昼夜の長短と四季）

第3章 太陰の運動（太陰の形状と運動・日食及月食）

第4章 暦（後編総設問）

以下、1914年『地理学教科書 通論之部』の中の「自然と国民性」³⁰より引用する。

以上説く如く、各種の地形と各種の気候とは、之に住する人類をして、不知不識の間に自ら特種の性質を有せしむるに至るべし。山地の崇高にして他の羈束を受けざる、其の住民に純樸堅忍の気風を生ぜしめるも度量小なると免れず。平原の開濶なる屢英雄の駆使に遭ふも、よく文化の進歩を見、従順圓熟の気風を生ず、されど延きて文弱に陥らしむることあり。海国は其の民に勇敢冒険を好む気風を生じ、往々輕佻の弊を見る、又熱温寒三帯気候の精神上に及ぼす影響は肉体上に及ぼす所に劣らざるなり

とあり、自然と人間の関わりをとらえるという地人相關的記述が教科書によっては一部みることができる。

第2の特徴として、後年に比べ地図学習指導の不徹底さを指摘できる。例えば、先述した1913年『地理学教科書 外国之部上中下』の例言は以下の通りである³¹。

地理学の観念は常に地図と対照するに非ざれば明確なる能はず拙著最新世界地図を参看して事実を土地と連関して理解記憶するを便とす章末に附する問題は生徒をして重要な事項に就き各自温習するに便せんとするに在り然れども此の目的は運用を待ちて初めて効果を獲べきものなれば教授当局の人士の特に此に留意せられんことを希望す〔以下略〕

地図と対照しながら地理学の観念を明確にしてほしいということが挙げられている。たしかに地理学においては地図を参照することの重要性は言うまでもない。しかし、この教科書で効果的な地図を用いた学習方法を提示しているわけではなく、地図学習指導の未熟さがみられる。さらに、「拙著最新世界地図を参看して」と小川は述べているが、小川の中学校用世界地図は、1927年の『中等世界地図帖』であるため、一般向けに著した地図帖を参照することを述べているが、地図の効果的使用法については提示していない。

以上のように、1910年代小川の教科書は日本地理、外国地理、通論という順に発刊された。日本・外国地理の教科書では、自然と人文現象を関連付けた記述内容は、後年のものと比べると少ない。しかしながら、『地理学教科書 通論之部』の第2編には、自然と人文現象を関連付けた記述内容（地人相關的記述）がみられ、環境決定論的意味あいもみられ、論理の厳密性に疑問は残るものの、物産地理的羅列の記述が多くみられる中で地人相關的記述の萌芽が見られる時期と言えよう。

第4項 1920年代の教科書

1919年に中学校令改正(勅令第11号)が行われ、国民道徳養成が強調され、中学校入学者年齢を明示せず、予科の設置も認められることになった。また、中学校令施行規則改正(文部省令第7号)によって、国民道徳の高揚のために「何レノ学科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授セン」として全ての教科で道徳を高揚するよう求められ、小学校第五学年修了者の入学を認め、予科の修業年限が2年になった³²。

1921年小川は文学部から理学部地質学科の担任となり、1924年には地球学団を結成し「地球」を創刊する。また、1928年『支那歴史地理研究』刊行した。こうした状況のもとで、小川は1920年代に地理附図以外に4冊の教科書を発行する(第6-2表)。

小川が1920年代に著した教科書は、1921年『中等地理学 外国之部 上中下』³³、1921年『中等地理学 日本之部』³⁴、1922年『中等地理学 通論之部』³⁵、1929年『新地理学 日本之部』³⁶である。その内容は、全般的に、教科書の活字を小さくするなどの工夫をして、教科書の内容の詳細化をしつつ、より高度な内容と多くの情報を盛り込もうとする小川の意図がうかがわれる。

1921年『中等地理学 外国之部 上中下』の例言³⁷では、

本書の初版は、前巻「日本之部」と同じく、本邦教科書界の通弊である簡単低級の風を打破せんが為に編述したものである。教科書が簡単に失するが為に無味乾燥となり、生徒は教室以外に於てこれを手にするを厭ふやうになるのは避けられぬ。欧・米諸国には我が国の様な簡単無味な教科書はない。中等地理学はこの弊を考へて(1)ポイント活字を用ひて内容を充実し、(2)小活字を以て説明・注釈・補足を加へ、(3)地図綴込版を出して本文と地図と対照の便を図り、(4)切図・ダイアグラム・写真版の斬新適切なものを選び、且大にその数を増し、(5)ダイアグラムを以て気温・雨量の季節的变化を示して、最も暗記に流れ易い気候を直観的に記述し

[以下略]

活字を小さくし、情報量を増やすことで、内容を充実し、高度な内容も学習できるようにしたことがわかる。また、気候の学習をグラフなどの使用で、暗記に流れないようにし、生徒が独学自習できることを目指し³⁸、教室での教授の能率をあげるためにさまざまな工夫をしたとしている。1925年『中等地理学 外国之部 上中下』も同様に詳細化を志向している。例えば「台湾地方・気候及び産業」³⁹では、

島の南部は回帰線内にあるを以て、気候概ね熱帯性にして、暑熱の時期長く、山地の外は霜雪を見ず、南部は夏季、北部は冬季、北東風に伴ふ雨多し。概して山地は雨量甚だ多けれども、台湾海峡に面する平地は雨量少し。／ 低地には榕樹・椰子・林投樹・檳榔樹繁茂し、巨大なる竹の密林あり。丘陵地には樟多し。又香蕉・鳳梨・龍眼肉・柑橘類多く、茄子・蕃椒は多年生なり。然れども高地には温帯の針

葉樹發育し、檜の良材に富む、阿里山は其の山地として殊に名あり。〔阿里山森林は新高山の西側海拔千米より二千五百米位の高地にある檜の美林なり、之を伐採して鉄索にて山下に下し、鉄道にて四十余哩を隔てたる嘉義に運びて製材す。〕

中央の山地はなほ蕃族の占むる所なれども、西部の平野はよく開け、漢人は人口灌漑を施し、水牛を使役して農耕に努む。台東平野亦開拓の緒に着けり。米・甘藷・甘蔗は農産の主要なるものにて、米は年二回の収穫あり、台中地方殊に多く、甘藷と共に住民の常食とし、余剰は盛に内地に移出せらる。〔台湾西部の平野は比較的雨少ければ埤(溜池)・圳(灌漑用水路)によりて米田・蔗田を灌漑す〕

とあり、小さな活字を用いることで情報量を少しでも増やそうとしている。〔 〕内部は小ポイントの活字であることを示す。しかし、1929年『新地理学 日本之部』では、1920年代に支配的だった詳細化の流れがかわる。その例言には、

本書は姉妹篇『中等地理学』と内容・体裁が類似してゐるが、これに比して稍記述を簡易にし、本文中に五号活字の説明を用ひず、紙数を少なくしてある。両者のいづれを採用するするかは、教授者各位の裁断に待つのである。今や国民思想涵養の急務なる時に当り、我が国土・国民を理解せしむべき地理科の任務は益々重きを加へる

とあり⁴⁰、1929年『新地理学 日本之部』は他の1920年代の他の教科書とは異なった方針である。例言にもあるとおり、内容を『中等地理学』の内容を簡単にし、小活字等による補足説明はない。言葉遣いは1921年と比べると「西と北には山地があつて、北西から来る寒風を防ぎ、東と南との近海には黒潮が近く流れるので、気候が温和であつて、小田原・大磯・鎌倉・葉山・北條など避暑・避寒に適する地が多い」⁴¹という表記になり、口語体になっている。

一般的に1920年代の教科書は、活字を小さくするなどの工夫をして、教科書の内容の詳細化をしつつ、より高度な内容を目指そうとする小川の意図がうかがわれる。情報量を盛り込むことによって学習者の知識量を増やそうとする意図がみられる。

第5項 1930年代の教科書

第2章の第2項で言及したが、1931年に中学校令施行規則改正がなされ、中学校は指導者教育機関ではなく「大衆教育機関」として位置づけられた。1910～20年代と比較すると明らかな方針転換である。また、1937年には中学校教授要目中改正がなされ、愛国心の養成が規定された。地理科における配当時間は日本地理を優先する乙表に統一されることとなり、内容は国家主義的な記述内容が主流となった⁴²。こうした状況下で、小川の7冊の教科書が発行されるが、小川は1930年の6月には京都帝国大学を定年退職、8月には京都帝国大学名誉教授となった。

1930年代に出された教科書は、1931年『中等地理学 日本之部 乙表』⁴³、1932年『中等地理学 外国之部 乙表準拠』⁴⁴、1937年『中等新地理 日本之部』⁴⁵、1937年『中等新

地理 外国之部』⁴⁶、1937年『中等新地理 概説之部』⁴⁷、1939年『新日本地理 中学校用』⁴⁸である。

第1に、この時期には地人相関的な記述が定着しつつあった。例えば、1932年『中等地理学 外国之部 乙表準拠』の「濠太刺利の地誌」⁴⁹では、

農業・牧畜業は主要産業である。農業は往々旱魃・豪雨の影響を蒙り、また大牧場主と小農との利害衝突のために東部・西南部の一部などの周辺地方に限られる。小麦を主とし、玉蜀黍・甘蔗・葡萄・柑橘その他の果実を産する。すべて農業は灌漑を必要とし、また旱魃のため収穫が一定しない。牧畜は次第に内陸の乾燥地に退き、また東南部では酪業及び肉類生産に転ずる傾がある。多く羊を飼ひ、羊毛の産は世界第一で、なほ肉・バター・皮革を産する。鉱物は豊富で、西部・東部の金、東部の石炭などを主とし、銀・鉛・亜鉛・錫・銅を出す。人口が甚だ少なく、耕地はまだ全土の1.1パーセントに過ぎないのに、国人は「白人濠洲主義」を唱へてアジアの移民を排斥し、また過度の保護貿易をなすため産業の発達を妨げ、貿易は概ね輸入超過で、財政も豊かでない。

とあり、「南米の産業」⁵⁰では、

熱帯地方の人口・産業の重心は内陸の高原にある。然るに北及び東の高原は海岸に急斜しその沿岸の低地は不健康地であるし、アンデス高原は大山脈で海岸から封鎖され、沿岸は沙漠で良港にも乏しい。故に、熱帯地方は内陸と海岸との交通が甚だ不便で、アマゾン・オリノコの如き大河も流域の人口が稀薄なためあまり使用されない。

[中略] 温帯とブラジル高原の南部とは、気候が良好で交通も便利なので白人の移民が多く、本洲産業の重心をなす。[以下略]

となっている。1930年代になると、自然と人文現象を関連付けようとする記述が多くみられるようになった。例言においても、小川は強くそのことを主張し、1931年『中等地理学 日本之部 乙表』の例言では、「地理教科書は簡単に過ぎ、従つて無味乾燥に流れ、生徒は只暗記を強ひられる結果となることは、本邦教科書の通弊といふべきである。本書はこれに鑑み、猥りに多くの地名を羅列することを避け、地理的理法を明かにし、生徒をして読書する間に自然に因果関係を理解せしめるようにした」⁵¹とあり、1937年『中等新地理 日本之部』では、1932年『中等地理学 外国之部 乙表準拠』とほぼ同じ趣旨であるが、「中等学校に於ける地理科の主要任務は、自然と人類生活との相互関係を明かにするにある」とし、1937年『中等新地理 概説之部』でも、「人類生活に対する地理的環境の影響に重きをおいた。即ち地文的事項は全紙数の約三分ノ一に止め、特に人文に係深き事項のみを選択した」⁵²と述べている。

第2の特徴として、先述したように、この時代になると愛国心の養成が教育に求められるようになる。教科書の例言においても、そのことは明確に表れている。例えば、1931年『中等地理学 日本之部 乙表』の例言では、「郷土中心主義より、各地方・各府県を単位として述べた。蓋し地理教授の出発点は郷土であり、愛国心は愛郷心によつて培はれるからである」⁵³とのべ、愛国心の始まりとして郷土中心主義を打ち出しつつ、1937年『中等新地理 外国之部』では、

〔前略〕想ふに今や世界を挙げて政治・経済上異常な難局に際会してゐる。その原因は一方に広大な領土、莫大な資源を独占し、敢てこれを開発しようとする民族があり、他方に資源乏しく、人口過剰に悩む民族があつて、両者相対立するからである。即ち全世界に互り、人類の生活が環境に適応しないからである。然るに満州事変以来、我が国民精神は猛然奮起し、進んでこの不調和を打破せんとし、世界の政治・経済界に大なる波紋を与え、我が国の国際的地位も躍進を続けつつある。総て世界人心の不安、国際情勢の変化、帝国の国際的地位等は外国地理を完全に教授することによつてのみ生徒に理解せしめ得るものである。即ち著者は同志の教授者各位と共によく新教授要目の趣旨を体し、右の如き本書の精神によつて、次代国民に「世界に於ける日本」、「世界に於ける人類の生活」を完全に認識せしめ、以て国家の期待に添はんことを期する次第である。

というように時代が後になるにつれて、太平洋戦争へ入っていく緊迫した状況が伝わってくる⁵⁴。しかしながら、地理教科書では露骨に他国を批判したりするものが少ないことも事実である。

第3に、観察重視の観点から地図・写真版・ダイアグラム等の直観教材をとりあげるようになった。例えば、1931年『中等地理学 日本之部 乙表』の例言では、「地理学は観察を基礎とする。しかし、観察の及ばない所は、地図・写真版を以て代用しなければならない。即ち地図・写真版・ダイアグラム等の直観材料を特に多く挿入し、これに適切な説明を加へ、本文の理解を援け、各地方の地理的特徴を知らしめることに努めた」⁵⁵とあり、1937年『中等新地理 日本之部』においても同様の記述がなされている。1937年『中等新地理 概説之部』では、「著者は地誌の緒言に述べた通り、地理学は地上の現象を場所的・空間的關係に於て研究するものであり、その研究法は観察を基礎とする。この点は概説に於ても全く同様である。故に本書に於ても分布は成るべく地図を以て示し、多く写真・ダイアグラムを以て観察を補助することにしてゐる」⁵⁶と述べている。

1930年代の教科書では自然と人文現象を関連付ける記述が定着し、それを伝える手段として、文字のみではなく観察重視の立場から写真や図表が相当数用いられるようになり、ここに地理知識を伝える方法の転換がみられると言えよう。また、愛国心の養成が目指されていたことも時代背景ゆえのこととみられる。

第3節 教科書『新外国地理 甲表準拠』の内容

ここまで1910年代～30年代までの教科書内容を、自然と人文現象を関連づける記述の有無、直観教材等の扱い方、国民精神涵養を目指す記述の有無等を中心に叙述してきた。こうした流れの中で、小川は1933年に『新外国地理 甲表準拠』(以下 1933年教科書)という教科書を著す⁵⁷。この教科書は小川のこれまでの教科書と記述方法が異なる上に、他の教科書執筆者とも違った記述内容であり、独特な視点をもった教科書である。

第1項 例言にみられる小川琢治の主張⁵⁸

長くなるがあえて引用を試みると、この教科書の例言は以下のとおりである。小川の主張が従来の教科書よりも長く述べられ、小川の抱いていた積年の地理教育観を伝えるものとなっている。

①日本中心主義の外国地理…〔前略〕世界地理を介して祖国の完全なる理解と国民精神の作興とに努めねばならぬ。本書は常に日本中心主義に則り、我が国と関係の深い諸国の地理を詳述し、特に彼我の国力・民族・文化の相異を明かにし、生徒をして我が民族及び国体の特異性を明かに認識させることに努めた。

②自学自習に即した教科書…生徒に自学自習の習慣を養はしめることは、教育上重要な任務である。然るに従来の地理教科書を見るに、その記述の形式は、教授者の講義の骨子だけを記したものが多く、随つて生徒は教授者の説明なしに教科書を理解することが困難である。著者は本書を編纂するに当り、従来の所謂『教科書式』の記述形式を改め、難解の事項には詳細な註を添へ、挿図には丁寧な図解を附し、生徒の好学心の啓発と自学自習の便に資するやう細心の努力を尽した。〔中略〕

③最も合理的な連絡挿図…挿図による直観教授は、地理教授上に甚だ有効であることは、今更論ずるまでもない。しかし挿図の最も合理的な利用法は、連絡挿図を用ひることである。

④豊富な挿図と詳細な図解…地理教科書の挿図は単なる装飾ではない。挿図は実に地理教科書の生命である。数万言を費して説明するも、なほ了解に苦しむところでも、一枚の挿図によつて直ちに理解される場合が少くない。地理的想像力の乏しい生徒に於ては、単なる文字上の説明だけでは、正しい地理的概念を把握せしめることが困難である。故に本書中には紙面の許す限り、多数の写真図・模型図・地図を挿入した。なほ従来の教科書の挿図には、図解を附したものが至つて少く、折角の挿図も十分に利用されてゐなかつた。本書にては、詳細な図解を附し、挿図の活用に一層の注意を払つた。

⑤地理区を明示した…或る地域の地理を述べる場合に、漠然と全地域を眺めないで、その地域内に於て、共通な地理的条件に支配されてゐる地理区を見出し、地理区内に於ける地人相関の理法とその特異性を見出すことは、最も合理的な地理研究法

である。〔以下略〕

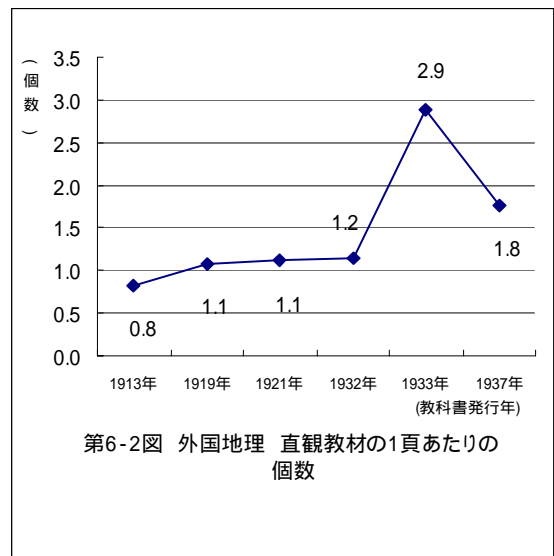
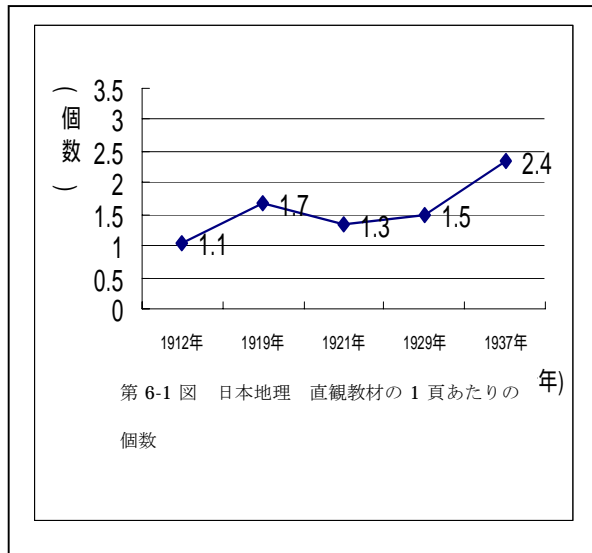
⑥有力民族の特性を明示した…現今の世界は、民族的割拠の勢をなしてゐる。我等は世界に於ける有力民族の特性を明かにし、以て我が国民精神の作興に資することが肝要である。殊に近年世界の列国は挙つて国民の団結と民族精神の鼓吹に努めてゐる。地理教授の任に当る者の責務は益々重大となつた

自学自習の習慣に即した教科書をめざした点、最も合理的な連絡挿図をとりいれ詳細な図解を附した点、地理区⁵⁹における地人相関の理法を学ぶ、という考え方を採用した点がこの教科書の例言にみられる。特に「連絡挿図」という考え方は、学問と教育とを連携した独創的な考えであり、その具体的内容を以下に述べる。

第2項 具体的記述内容

(1) 連絡挿図の適切な使用

1920年代の教科書に地人相関的記述がある程度定着し、1930年代になると図表等の直観教材を効果的に使用しようとする方法論への転換がみられた。後に論ずることになるが、それは当初は直観教材である図表写真等の単純な数的増加現象にみられた(第6-1図;第6-2図)。



第6-1図 日本地理 直観教材の1頁あたりの個数 第6-2図 外国地理 直観教材の1頁あたりの個数
〔第6-1図・第6-2図ともに筆者実見により作成〕

しかし、単なる量的増加ではなく効果的利用が意図され、1933年教科書においてその考えは結実した。特に第6-2図をみると1933年教科書では直観教材の数が各段に増加していることがわかる。それまでの教科書とは異なり、直観教材(地図・図表・写真等)を多く

用いるだけでなく、連絡挿図を用ひること、つまり何枚かの挿図をもちいることで、その地理的分布状況を、歴史的、原因究明的、時系列的に学習することができるとした点が、この1933年教科書の独自性である。

また、小川は1933年教科書で従来の所謂「教科書式」記述形式を改め、直観教材としての図表・写真絵等を用い、地理教授上有効である「挿図」をただ、装飾的に掲載するのではなく解説とともに載せることで、その挿図が何を意味するのかを明確にし、自学自習できるようにした。それまでの教科書では、挿図が説明なしにのっていることが多かったためである。

連絡挿図の代表的具体例として「カナダのウィニペグ附近の小麦帯」⁶⁰をとりあげる。そこでは単に小麦畑の写真・図或は小麦産地のドットマップを挿入してあるばかりではなく更に一步進んで、この平野がなぜ小麦地帯になったのかという説明を連絡挿図によって効果的に学習する工夫をみることができる。

まず「かつて大陸氷河に被はれた地域」という挿図が挙げられ北米の大陸氷河の分布状況を示す。次に、「氷河湖の成因」として、「氷河が移動する際に軟弱な地盤に①〔図の番号 以下同じ〕の如き凹地を穿ち、これに水を湛へて湖をつくる。また氷河のもたらした土砂が河川や谷の出口を堰きとめると②③の如き湖をつくる。かくして出来た湖を氷河湖と名づける」とし、挿図「カナダの氷河作用によつて出来た湖成平野と小麦産地との関係」で、かつて北米の北部を被つてゐた氷河の末端と台地との間に一時湖水をつくつたことがある。その後氷河の消滅に伴ひ、これ等の湖は涸れて、その跡に肥沃な湖成平野をつくつたとの説明を載せて、結果として小麦地帯になったことを理解させる内容となっている。

地理的現象を考察する際に、時間的・歴史的手法を用いることで表層的知識に陥りがちな地理授業に変化を加えた点で小川のこの1933年教科書はそれまでの教科書にはみられない特徴をもっている。

その他、特定の地理的事象が形成される原因を歴史的に説明したものとしては、挿図「メキシコの地質断面図」⁶¹において、「台地上の盆地は、かつて湖であつたところで、火山灰と土砂の混合から成る湖成平野である。随つて地味が肥沃であるが、降雨が乏しいため荒地となつてゐる所がある」とその地形の成因を説明したり、挿図「熱帯アメリカの黄熱病分布」⁶²では1900年、1919年、1921年、1924年と並べ、熱帯性疫病が蔓延していたが、近年衛生設備の発達に伴つて、著しく減少していることが図示され連絡挿図が適切に用いられている。

(2) 連絡挿図以外の工夫

「地溝の説明」⁶³では、「地殻の一部が亀裂に沿うて移動するのを断層と呼ぶ。①の如き土地に断層を生じて。地盤の一部が陥没すると②の如き凹地が出来る。この凹地を地溝と呼ぶ。断層帯に沿うて陥没を起こすと③の如き地溝を生ずる。地溝が連続して長くなるも

のを地溝帯といふ。タンガニイカ湖は東部アフリカの地溝帯に位し、地溝の一部に水を湛へた湖である」とし、挿図をただ掲載するのではなく、学習者が理解し易いよう説明がなされている。

「アパラチャ附近の瀑布」⁶⁴では、「アパラチャ山脈東縁のピーモント台地は古い堅い地層から成つてゐるが、その麓の海岸平野は軟弱な沖積層である。随つて台地から流下する数多の河川は、硬さを異にする両地層の境界に各々瀑布をつくつてゐる。これ等の瀑布は線状に相連り、所謂瀑布線をなしてゐる。またこれ等の瀑布の畔には水力利用の工場が多い」とし、地形の成り立ちを説明し、産業にまで説明が及んでいる。自然と人文現象を関連付けた例がみられる。

1910年代の小川の教科書においては、地理学の観念は地図と対照して育成するべきものと強調していた。自然と人間を関係づける記述も中には見られたが、全体的には地名羅列的なものが目立っているのが特徴である。1920年代の教科書は、地人相関的記述がみられるようになるものの、内容の詳細化が支配的な傾向となる。小川が言うには日本の地理教科書の内容は低級であるから小文字により内容を多くすることで充実させ、写真やグラフを増やし、地名に英語を付記するなどの内容の高度化をはかっているとも述べている。

1930年代になると、地理科が国民的精神を涵養することが地理科の重要な任務のひとつであるとした。内容的には1920年代に比べ地人相関的記述はより多く見られるようになったが、観察を重視し、実際に観に行くことができない場合のために地図・写真版・ダイアグラム等の挿図を特に多く挿入する工夫をした。

そうした流れの中で、1933年教科書が発刊される。それまでの教科書とは異なり、直観教材(地図・図表・写真等)を多く用いる。その直観教材を用いて、地理的事象の移り変わりを歴史的に考えさせる方法を用いているところが、この1933年教科書の独自性をもったところで、小川の地理教育観をみることができる。挿図はただ載せるだけでなく、連絡した挿図を用いること、つまり何枚かの挿図を連続で用いることで、その地理的分布状況を、原因究明的、時系列的に学習することができるとしたのである。

こうした自然と人文現象を関連づけつつ、歴史的に地理的現象をとらえていこうとする地理教育観のはどのように形成されていったのであろうか。

第4節 小川琢治の地理教育観の形成要因

第1項 他の教科書執筆者との比較

他者の教科書において、それ以前に小川と同じ考えに立った教科書、つまり適切な挿図を用い、地理的事象を歴史的に捉える手法をとった地理科教科書はあったのであろうか。1929年発行の小林房太郎『新地理 中学用 外国 下巻』の「アメリカの産業」(小林1929: 48-50)では、「鮭畏」という絵が掲載され、その説明として「加奈陀で缶詰にされる鮭は殆どブリティッシュコロンビアから出るが、下図の如き鮭畏で主に捕獲されたものである」

という解説があるのみである。また、「北亜米利加洲の物産分布」が載せられているが、これに対する解説はない。

1932年発行の地理教授同志会による『新制世界地理 甲表用 八年版』では、例言において「知識の直観化と、趣味の喚起との為、挿画・挿図を多くしたこと、無味乾燥を避けて、内容・文体を趣味的にしたこと、実用的でない知識を避けて、成るべく实际的・実用的にしたこと」等、挿図・挿画を多くしたと述べている。写真よりも絵が多いのが特徴で、「図解」として説明がなされている。この点は小川が1933年教科書で目指していた視点と共通するところがあるものの、1932年発行の同著者の『新制世界地理 乙表用 八年版』においてもほぼ同じ内容で、歴史的視点から地理的事象を捉えようとする直観教材の使用方法はみられない。

1932年守屋荒美雄著『新選地理世界之部 乙表用八年版』（守屋1932）の例言では、「地人関係の重視、我が国と関係深き地方の詳述、都市の羅列廃止、自学自習への配慮、満州国の詳述、世界の地帯構造の記述」の6点を重視したとある。しかし、1932年守屋荒美雄・北村詮次郎『教範世界地理 甲表用 八年版』（帝国書院）、1932年三省堂編輯所『新制最近世界地理 改訂版 甲表準拠 上下』（三省堂編輯所1932）においても守屋と同じような説明であり、歴史的には説明されていない。

小川と同時期に著された教科書には、小川が目指した歴史的に地理を捉える挿図の用い方をしているものはみられない。小川が歴史地理的に、つまり時間経過の視点から地理的現象をとらえることを重視していた点は独創的なものであったことがここからも理解される。また、連絡挿図を用いるために、必然的に直観教材の数が多くなることも以下の第9-2表からも明らかである。

第6-4表 1930年代中学校地理科教科書の直観教材数の比較

	1933年小川琢治 『新外国地理甲表準 拠 上・下』	1932年地理教授同志 会『新制世界地理 甲 表用 八年版』	1933年石橋五郎 改訂三版(1931年初 版)『新体中等地理外 国部甲表準拠 上 下』	1935年の石橋五郎 訂正6版『三訂新体中 等地理 外国部 甲表準拠 上下』
全体頁	295	178	298	287
図表	441 (1.5)	76 (0.4)	303 (1.0)	306 (1.1)
絵・写真	409 (1.4)	251 (1.4)	362 (1.2)	410 (1.4)

〔表4は筆者実見により作成、()内は1頁あたりの数を示す。〕

小川が教科書執筆で重視した地理学習上の概念・用語を知るために第6-5表を作成した。小川の地理教科書の例言にでてくる重要単語を抽出したものである。直観教材を適切に使用することは当初より主張されている。地人相関的記述や国民精神の涵養、観察の重視な

どが 1930 年代から強く主張されていることが目立つ。「地理区」への言及は田中啓爾が先述した「日本の地理区」を 1927 年に発表してから、小川にも影響を与えたものと考えられるが、田中が中国地方と四国地方をまとめて地理区としているが、小川はこの立場をとらず中国地方と四国地方は別にとりあげている。

小川の直観教材を重視し、歴史的に地理的事象を説明するものは 1933 年教科書『新外国地理甲表準拠』を除いて他にはない。こうした挿図の連続的使用による地理的事象を歴史的にとらえる教科書がでてきた背景には、小川の学問観が関係しているのではないだろうか。地人相関的記述とあわせて次項において検討する。

第 6-5 表 小川教科書の例言にみられる用語

初版年	書名	(地図・図表・写真等) 直観教材の適切な利用	自習用問題	学習内容の反復	地人相関記述	無味乾燥発言	小文字による補足説明の充実	自学自習	愛郷心から愛国心へ	観察の重視	地理区の設定	国民精神の涵養
1912	地理学教科書 日本之部	例言なし										
1913	地理学教科書 外国之部上中下	○	○	○								
1914	地理学教科書通論之部	○		●								
1921	中等地理学 日本之部					●	○					
1921	中等地理学 外国之部 上中下	○	○		●	○	●					
1922	中等地理学通論之部	○	○		○			○				
1927	中等世界地図帖											
1929	新地理学 日本之部	○										
1931	中等地理学 日本之部 乙表	○			○				○	○		●
1932	中等地理学 外国之部 乙表	○			○					○	○	●
1933	新外国地理 上下 甲表準拠	●			○			●			○	●
1937	中等新地理 概説之部	○			●				○	○		●
1937	中等新地理 日本之部	○			○	○			○	○		○
1937	中等新地理 外国之部	○			○					○		●
1939	新日本地理 中学校用	○	○	○			○	○		○	●	●

〔○は例言に出てくる用語、●は特に強調されているもの、筆者実見により作成〕

第 2 項 地理学観と地理教育観

(1) 地人相関的地理学とのかかわり

小川は、1898 年には論文「地理学とは何ぞや」⁶⁵において「地理学は地球の上に現はるゝ

事物を観察し記載するに止らずして、進んで其相互の関係推究して之を調諧せる一団となさざる可らず」と述べ、早い時期から小川は自然と人文現象を関連付けようとする立場、すなわち地人相関的立場に立っていた。1899年「日本群島地質構造論」(地学雑誌 11・14)、1900年『百万分一日本帝国地質図説明書』、1901年『二十万分一地質図幅及説明書(高知他)』、1906年「西南日本地質構造概観」(地質要報 39)、1907年「西南日本地質構造論(地学雑誌 19)」といった地質学者として成果を残しつつも、1908年に京都帝国大学の地理学の教授になる頃には、日本群島を地理学の視点から研究しようとした。その成果は『日本群島』に著されているが、地理学を講義するに当たり小川が考えていたことは、「一地方の地理学的記載に当り目的とすべきは、単に山嶽河流都邑気候生物住民産業交通に関して箇箇の材料を列挙するに非ずして、其の由来する所以を究め、その相互に関係影響する所を明にするを期せざる可らず」⁶⁶とし、単に事実を列挙することを戒め、それらの由来を歴史的に捉える姿勢がうかがえる。例えば、ペリーが来航したのが下田である理由を、伊豆半島の東岸が海岸線は小屈曲のみで下田のみが地形上から良港であるため、西方の遠州灘を航行する帆船の繫泊地でもあり、東海道交通の要地でもあったため、黒船来航時に世界に名が知られたのは、この位置と地形によるものであるとしている⁶⁷。

こうして人文現象の形成要因を、自然現象から捉える手法は、『戦争地理学研究』(小川 1925)においてもみられるところである。こうした方法が、小川の教科書執筆にも影響を与えたことが推測される。ここには小川が教科書執筆において重視した柱の一つである「地人相関的記述」との関連性をみることができる。

(2) 歴史地理学とのかかわり

小川の代表的著作である『支那歴史地理研究』⁶⁸では、三国西晋の裴秀の時に支那全図が完成し、唐代には禹跡図によかなかなり正確な地図が作られたが、元の時代にアラビアから地球儀やプトレマイオスの地理学が導入されたことで経緯線を地図にいれようとしたが定着はしなかったと中国の地図史について述べている。さらに、『山海経』などを用いて古道の地図化を成し遂げ、五蔵山経にみられる自然崇拜的な記述、仙女美人、半獣半人について言及したうえで、中国、日本、希臘の神話について比較考察している。『支那歴史地理研究 続集』⁶⁹も歴史を対象とした地理的研究であり、この両著作では、人文と自然現象との関わりについての言及はみられない。

著書『人文地理学研究』は、『地学雑誌』や『地球』に掲載したものをまとめたものであるが、その中の日本の村落研究では、内務省が行った氏神を無視し合祀を強制したことの失錯をとりあげ、「過去の居住状態の成立と変遷を顧みずして現在及び将来を考察するのは考察法其ものゝ欠陥で、これより生ずる誤謬は許容さる可らざれるものと信ずる」⁷⁰とし、変遷を踏まえることと研究を重視している。日本の都市研究においても、都市の起源と語源という歴史的考察法をとっている⁷¹。第 6-1 表にもある「越中国西部の荘宅 Homesteads に就て」、「居住地理学の問題としての日本住宅」、『近畿地方の土地と住民』⁷²においても、歴

史的な変遷を捉える手法を用いた地理学研究がみられる。

こうした著作の他にも、小川は「人文現象は非常に複雑であるが、人類化した風景なるものは人類の土地に与へた痕跡であつて、人文地理学に関する事実は自然風景に加へた変形の程度を目安として節制すればよい訳になる。故に自然風景が人類の集合により変形されて行く行程を辿ることが、人文地理学の目標として歩むべき大道で、人文地理学には不完全ながら自然界に於ける人類の外側を論ずる科学 *Science du dehors humain dans la nature* といふ定義を与へることが出来るかも知れぬ」⁷³とし、変形を指標とし、それを辿ることが目標としていることを考えると、小川の地理学観の根本にあるのが歴史的思考を伴ったものであることがわかると言えよう。こうしたことから変遷や移り変わりをとらえることが、教科書の教科書の挿図の用い方にも如実に表れていると考えられる。

また、小川はさらにバロー(V. Vallaux)がブルターニュ研究をした際に、集団事実の叙述の精確さを求め観察を重視したことから、郷土を出発点として、土地と住民の関係を明らかにするためには、実証的研究法が必要であると、実際に観察することを重視した⁷⁴。このことは小川が教科書執筆に際して、写真や図を多く用いていくことに関係しているかもしれない。

小川の地理学観の基礎は、「地理学の統一と地理学研究への歴史的思考法の導入」⁷⁵にあったと岡田は指摘した。前者の統一とは、地文と人文の統一のことである。たしかに、学問だけではなく教科書執筆にあたって、小川は地人相関的記述と歴史的思考の地理への導入に意味を持たせている。また、小川は歴史地理学を「歴史的な自然風景論」と「文化風景史」に二分されるとしていたことから、この二つの特徴は小川地理学の柱であった⁷⁶。小川が学問的に目指していた自然と人文の関係を捉え統一することと、歴史的思考を導入することはたしかに教科書記述に反映されているとみることができる。

たしかに同時代の教科書において、他の執筆者において歴史的に地理的事象を捉える記述をみることはできない。このことから、小川の中学校地理科教科書は彼の学問観がはっきりと反映されており、独自のものであると言えよう。

第5節 地理教育史における小川琢治の位置付け

旧制中学校における地理教育が山崎らによって本格的に始まったが、地理教育は暗記教科としての傾向が強かった。しかし、次第に地理科教科書において、無味乾燥な地名の羅列を忌避する考えが生まれ、1920年代後半から、自然と人文現象を関連づけるという地理学的方法論をとり入れた地理科教科書が書かれるようになる。小川以外の教科書執筆者たちにおいても1920年代に入り、地人相関的な教科書記述を目指されるようになる。1930年代に入ると、その地人相関的理法の概念を生徒にいかにかに学ばせるかという方法主義的な立場が生まれ、小川においてもその傾向がみられた。さらに、文字情報のみで知識を伝えるのではなく、教科書内の直観教材(挿図等)を増やすことで、地理科の内容を生徒により

効果的に理解させることを意図した。そこには、地理知識を上から下へと降下させるだけの地理教育から、より効果的な地理教育方法の追求へと転換した過程を見ることができる。

小川は、方法主義的立場をとるに際し、歴史地理学の方法論を地理教授に取り入れ、地図・写真を有効かつふんだんに用い教科書『新外国地理 上中 甲表』においてその方法論は具現化された。2枚の地図を並べ、自然と人文現象の相関関係を生徒に考えさせるという空間的思考にとどまらず、地理的現象が変化するさまを時間的思考によってとらえさせるのが小川教科書の特徴でもあった。

また、小川は自学自習の立場も明確にもっており、それまでの教科書が教授者の講義の骨子だけを記したものが多かったことについて批判している。戦後に於いて、石田は戦後の地理教科書を取りあげ、小川同様の批判を行っている。すなわち、石田は、外国の教科書と比較すると「日本の教科書は簡単だとい一言に尽きる」⁷⁷と述べ、さらには「日本では小中学校から『学問的なこと』『でき上がった地理学』を教えようとし、必要もないし、また理解もできぬようなことを教科書にもりこむ」⁷⁸と述べている。このことは戦後においても地理教科書の記述内容の傾向は小川の時代から何ら変わっていなかったことがわかる。

しかし、1930年代に入ると、地理学の観念、方法論を学ぶよりも、愛国心教育へと流れていく時代にあって、彼の地理教育観は中学校教育において定着することはなかった。この潮流は小川に限ったことではなく、他の教科書においても愛国心を強めることを意図した内容が支配的になっていく。地理学を効果的に学習させる方法を考えながらも、時代状況から国民精神を鼓吹する教科書内容へと意が注がれ、教育方法については語られなくなった可能性がある。また、小川が文検出題者⁷⁹という教員採用において大きな影響を与える制度に関与しなかったということからも、小川の教科書の影響力が低下していったと考えられる。

【注】

-
- 1 辻村太郎「山崎直方と小川琢治」『地理』15-12, 古今書院, 1971, 7頁。
 - 2 石田龍次郎「山崎直方と小川琢治—東西両大学の地理学講座創設まで—」『地理』15-12, 1970, 21頁。
 - 3 水津一郎「小川琢治先生とその後の日本における歴史地理学」『地理学評論』44, 1971, 565-580頁。
 - 4 岡田俊裕『日本地理学史論 個人史的研究』古今書院, 2000。
 - 5 中川浩一は『近代地理教育の源流』において、第二次世界大戦以前の中学校の地理科教科書を研究しているが、中学校についての言及は少なく、小学校の教科書が中心である。唐澤富太郎「教科書の歴史—教科書と日本人の形成—」もあるが、やはり小学校についてが中心である。

- 6 以下の諸文献から第1表を作成した。①石田龍次郎「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」『地理学評論』44(8), 1971年。②岡田俊裕『日本地理学史論 個人史的研究』古今書院, 2000年。③織田武雄「小川琢治」『地理学辞典改訂版』二宮書店, 1989年, 55頁。④小川芳樹他編『一地理学者の生涯』1941年。⑤「本会評議員小川琢治博士訃」史学研究会『史林』27-2, 1942年, 144-157頁。⑥国立教育政策研究所教育図書館著者資料収集
- 7 1907年5月に史学地理学第2講座は設置されていたが, 小川が農商務省の技師であったため就任が遅れ, 1908年5月に教授となった(京都帝国大学『京都帝国大学史』1943, 723頁)。
- 8 第1次発掘調査(1912年)にあたったのは, 東京帝国大学教授黒板勝美・喜田貞吉, 第2次(1913年)は東京帝国大学理科大学講師鳥居龍藏, 第4次(1915年)は東京帝国大学講師原田淑人・同大学嘱託柴田常恵が, 第5次(1916年)は, 京都帝国大学教授内藤虎次郎・同大学助教授今西龍があたり, 最終の第6次(1917年)は, 京都帝国大学助教授浜田耕作・同大学嘱託梅原末治によって行われ, 多くの遺物が発掘された。小川の多彩な活動を物語るものである。
- 9 別府俊紘編『宮崎県の百年』山川出版社, 1962, 144-147頁。
- 10 その他に, 地学専門書である『数理地理学』宇宙物理学研究会, 1948年。がある。
- 11 湯川秀樹『旅人—湯川秀樹自伝—』角川文庫, 1960。
- 12 次男貝塚茂樹は中国史学者, 四男小川環樹は中国文学学者であり, 小川の影響が子どもにも伝わっていることがわかる。
- 13 小川没後, 1944年に小川琢治『日本群島』が出版されている。
- 14 小川琢治「矢津昌永氏中等地文学を読みて」『地学雑誌』10, 1898, 34-40頁。
- 15 小川琢治「矢津昌永氏中等地文学の定義を駁す」『地学雑誌』10, 1898, 160-163頁。
- 16 小川琢治「人生に及ぼす地理学的影響(牧口常三郎君著人生地理学の批評)」『地学雑誌』16, 1904, 53-56頁。
- 17 小川琢治「小学校地理学教授上の注意」『地学雑誌』11, 1899, 311-318頁。
- 18 その他, 小川の地理教育関係の論文は, 「地理科教授に就いて」(滋賀県教育会雑誌, 202), 「愚母悪妻主義の女子教育を改良せよ」(1919年太陽, 25《4》, 123-128), 「地理教材としての地形図」(地球, 2, 360-362, 440-443, 526-531)などがある。
- 19 小川琢治「小学校地理学教授上の注意」『地学雑誌』11, 1899, 318頁。
- 20 守屋荒美雄は, 1872年岡山県に生まれ, 1896年に文検(文部省教員検定試験)に合格した。各地で教職をへて, 1911年, 獨逸学協会学校勤務を経て, 教科書執筆に専念する。1916年には帝国書院を創設し, 多くの地理科教科書・地図帳を発行する。晩年には, 帝国第一高等女学校(現吉祥女子中学・高等学校)を創設し, 1925年創立の財団法人関東商業学校(現関東第一高等学校)の経営にも参画した(1938年没)。
- 21 前掲11)
- 22 国立教育研究所編『日本近代教育百年史 4』1974, 1081頁。
- 23 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史 第5巻』龍吟社, 1939, 153頁。
- 24 小川琢治『地理学教科書 日本之部』富山房, 1912, 6-7頁。初版名は『地理教科書 日本

- 之部』であり、1928年までに7訂された教科書である。
- 25 小川琢治『地理学教科書 外国之部上中下』富山房, 1913。(1927年版)。初版を参照したが、1927年まで14版を重ねた教科書である。
- 26 小川琢治『地理学教科書 通論之部』富山房, 1914。
- 27 小川琢治『地理学教科書 外国之部上中下』富山房, 1913。
- 28 「通論」とは、地誌ではなく地形・海洋・大気などの内容を主とするものである。
- 29 小川琢治『地理学教科書 通論之部』富山房, 1914。
- 30 前掲26) 104-105頁。
- 31 小川琢治『地理学教科書 外国之部上中下』(1927年版)富山房, 1913, 1-3頁。
- 32 教科書研究センター『旧制中等学校内容の変遷』ぎょうせい, 1984, 512頁。
- 33 小川琢治『中等地理学 外国之部 上中下』(1925年版)富山房, 1925。
- 34 小川琢治『中等地理学 日本之部』富山房, 1921。
- 35 小川琢治『中等地理学 通論之部』富山房, 1922。
- 36 小川琢治『新地理学 日本之部』富山房, 1929。
- 37 この教科書では巻末にカラーの地図がつけられるようになった。
- 38 小川は1927年『中等世界地図帖』で「覆図」を多用する。覆図とは、産物・人口・人口密度などが描かれたトレーシングペーパーのことで、基本図の上にかぶせて使用する。他の地図帳でも若干みることができるが、小川琢治の地図帳が最も多く使用していることが特徴である。
- 39 小川琢治『中等地理学 外国之部 上中下』富山房(1925年版参考), 1921, 100-103頁。
- 40 小川琢治『新地理学 日本之部』富山房, 1929, 1-3頁。
- 41 前掲36) 6頁。
- 42 教科書研究センター『旧制中等学校内容の変遷』ぎょうせい, 1984, 214頁。
- 43 小川琢治『中等地理学 日本之部 乙表』(1933年訂正版)富山房, 1931。
- 44 小川琢治「中央日本の洪積世氷河作用に就いて」『地球』16, 1932。
- 45 小川琢治『中等新地理 日本之部』富山房, 1937。
- 46 小川琢治『中等新地理 外国之部』富山房, 1937。
- 47 小川琢治『中等新地理 概説之部』富山房, 1937。
- 48 小川琢治1939a.『新日本地理 中学校用』富山房。
- 49 小川琢治『中等地理学 外国之部 乙表準拠』富山房, 1932, 4-5頁。
- 50 前掲49) 54-55頁。
- 51 小川琢治『中等地理学 日本之部 乙表』(1933年訂正版)富山房, 1931, 1-3頁。
- 52 小川琢治『中等新地理 概説之部』富山房, 1937, 2頁。
- 53 前掲51) 2頁。
- 54 小川琢治『中等新地理 外国之部』富山房, 1937。
- 55 前掲51) 1-2頁。

-
- 56 小川琢治『中等新地理 概説之部』富山房，1937，1-2 頁。
- 57 小川琢治『新外国地理 上中 甲表』富山房，1933。
- 58 なお，1933 年『新外国地理甲表準拠 上・下』には，改訂版があるが，編纂の趣意にかわりはないと書かれている(1935 年 3 版 1 頁)
- 59 地理区については，田中啓爾「日本の地理区」地理学評論 3-1，1927 年 に詳しい。
- 60 小川琢治『新外国地理 上中 甲表』富山房，1933，73-75 頁。
- 61 前掲 57) 98 頁。
- 62 前掲 57) 105 頁。
- 63 前掲 57) 34 頁。
- 64 前掲 57) 82 頁。
- 65 小川琢治「地理学とは何ぞや」『地学雑誌』10，1898，504 頁。
- 66 小川琢治『日本群島』弘文堂書房，1944，2 頁。
- 67 前掲 66) 111 頁。
- 68 小川琢治『支那歴史地理研究』弘文堂書房，1928，64-66 頁。
- 69 小川琢治『支那歴史地理研究 続集』弘文堂書房，1929。
- 70 小川琢治「日本の村落」『人文地理学研究』古今書院，1928，45 頁。
- 71 小川琢治「日本の都市」『人文地理学研究』古今書院，1928，83-120 頁。
- 72 小川琢治『近畿地方の土地と住民』京都府教育会，1915。
- 73 小川琢治「科学としての地理学」『人文地理学研究』古今書院，1928，30 頁。
- 74 前掲 73) 19-29 頁。
- 75 岡田俊裕『日本地理学史論 個人史的研究』古今書院，2000 年，120-121 頁。
- 76 小川琢治「地理学序論(2)」『地理学講座 4』地人書館，1931，9-34 頁。
- 77 石田龍次郎『外国と日本の地理教科書の比較調査』国際教育情報センター，1967，37 頁。
- 78 前掲 77) 45 頁。
- 79 文検とは，1885 年から 1943 年まで行われていた制度で，独学で師範学校，中学校，高等女学校の教員免許状を取得しようとする者に対して，文部省が行った資格検定試験のことである。なお，戦前の文検制度と地理科については，佐藤由子『戦前の地理教師』古今書院 1988 に詳しい。